

CONTENTS

地域会だより	1
連載【隔月 全6回】「環境建築」その先へ 第4回 -立体最小限住居・再々考-	2
川島 範久	
岐阜発 JIAの窓 辻琢磨氏 講演会 ゆっくりとなめらかに建築を考える	4
大瀧 繁巳	
TOPIC 羽島市役所旧本庁舎の利活用に関するシンポジウム	5
服部 昌也	
追悼 故 清水 一男氏 静かな熱意	6
奥野 美樹	
故 森 鉦一氏 爽やかに ARCHITECT は不滅なり	6
森口 雅文	
保存情報 第263回 データ発掘：丸一酒造株式会社	7
後藤 文俊	
編集後記	7
石川英樹・川本直義	
「第10回 JIA東海住宅建築賞2023」 現地審査及び公開最終審査会	8
吉元 学	

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部

- ・12/2 第39回JIA東海支部設計競技
- ・12/15 第6回支部役員会

■JIA静岡地域会

- ・12/7 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)／忘年会の開催

■JIA愛知地域会

- ・12/1 賛助会企業PR会
- ・12/1 第6回役員会
- ・12/22 賛助会企業PR会
- ・12/22 第7回役員会
- ・12/1、8、15、22
名古屋市立大学「建築家の仕事」
- ・12/13 一寸格子ワークショップ 猪高小学校建築教室(第2回目)

■JIA岐阜地域会

- ・12/2 「2023年度 JIAの窓 "ぎふ「20×20」コミュニケーション」
17:00～20:00
場所：岐阜ビル1階 (岐阜市若宮町6-2)
- ・12/19 第8回役員会 18:30～20:30

■JIA三重地域会

- ・12/8 第6回役員会、第5回例会、第3回会員研修会
「再生活用を法規で支える～既存不適格の適法改修解説と事例説明～」
講師：建築再構企画代表：佐久間悠氏
- ・12/9 三重建築学生合同課題発表会2023
ゲスト：ナノメートルアーキテクチャー 三谷祐樹氏

表紙 常滑の景色……⑨「現地調査」

全国大会が終わりました。大会をつくり上げた、すべての方に感謝いたします。

写真は、旧丸丸陶管母屋を実測するメンバー。紆余曲折があり、なかなか結べない賃貸借。ドギマギしていましたが、ギリギリでの契約。ハレて、最終現地調査の風景です。
原稿を書いている今は、大会前で成功を夢みているときです。



浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画

立体最小限住居・再々考

「立体最小限住居」と「箱の家-I」

2022年3月に竣工した「豊田の立体最小限住宅」は、愛知県豊田市に建つ若い夫婦と子供ふたりのための住宅であり、私が設計してきた中でもっともローコストのプロジェクトだった。必然的に「住宅において譲れないものは何か」を考えることになった。

その際に振り返ることになったのは、難波和彦による「箱の家-I」(1995年竣工)であり、彼の師である池辺陽の「立体最小限住居」(1951年竣工)だった。

池辺の「立体最小限住居」がつくられたのは、大規模な住宅不足を短期間で解決することが求められた戦後復興期だった。この時代の一連の小住宅は、民主的な核家族制度に向けた近代的な椅子を中心とする生活様式に再編成＝「機能分化」することを目指していた。「立体最小限住居」は、極限的に切り詰められた寸法システムと、吹抜けを利用した一室空間が特徴であるが、それは住まいの機能分化を進めながら、整理し、立体的に組み立て直すための手法でもあった。

やがて高度経済成長期になると、nLDK型の住居タイプが主流になっていった。しかし、1990年代初頭のバブル崩壊前後に、多様で緩やかな共同体としての家族が見直され、1950年代の小住宅に見られた開放的な一室空間の再評価が行われるようになった。そのような時代背景の中で提案された「箱の家-I」は、難波がそれまで手がけた住宅の中でもっとも工事単価が安いものだったが、それと同時に、空間性能(構造、温熱環境、メンテナンス性)を犠牲にしないためのさまざまな条件を整理したものでもあった。こうした中で、コンパクトな箱型形状、単純化された構法、

吹抜けでつながる一室空間、南面大開口などの諸要素が導き出された。

難波は、「箱の家-I」「箱の家-II」を作品発表した際に「立体最小限住居・再考」という論考を『新建築住宅特集』1995年8月号に発表し、その中で池辺の「立体最小限住居」とそれに関連する文章を紹介している。そこで池辺は「まずデザインの最低限の役割は、与えられた予算で可能なかぎり住まいの質的な向上を図ること」であり、「デザインの社会的意味は、居住者の発展に対する積極的意欲を燃え上がらせることにあり、そのみを通じて住宅問題に結びつき得る」(『建築文化』第9巻 第96号、1954年1月)と述べている。また、この後に難波が執筆した『戦後モダニズム建築の極北——池辺陽試論』(彰国社、1998年)では、以下のような池辺の言説が紹介されている。

「住居は生きるためのものでなければならず、それに何等のものを付け加える必要はない。問題は生きることは何かということ掘り下げることであり、住居デザインの追求にとって、このことより外に、何らの言葉に要しないのである。そしてこの問題と直面せざるを得ないのは、やはりローコストの住居である。ここでは問題をごまかすわけにはいかない。すべての部分が生きるために役に立たねばならない。私はここ以外に住居が芸術として存在する意味はないと考えている。」
(「快樂主義の傾斜とたたかう」『新建築』5511)

「立体最小限住居」がつくられた時代と「箱の家-I」がつくられた時代、そして現在とでは、住宅問題の局面は異なる。しかし、池辺が述べているような「住



図1:西側外観(写真:鈴木淳平)

居デザインの社会的意義」は、現代においても基本的には変わっていないといえるだろう。生きることは何かを掘り下げ、空間と材料の働きを徹底的に鍛えること。これは、地球環境危機の時代である現在においてこそ、改めて取り組むべきことだろう。

「豊田の立体最小限住宅」

以上を踏まえ、「豊田の立体最小限住宅」を設計した。ここで、構造の安全性はもちろんのこと、温熱快適性・省エネルギー性を確保したうえで、内(家族)と外(都市)に開かれ、自然(太陽や風)に開かれていることは、現代の都市住宅として譲ってはならない、と考えた。

そこで、東西に細長い敷地で、南北両隣には建物が近接して建つものの、2階レベルの南東方向には広い空を望む、といった周辺環境に呼応する計画とした。具体的には、間口2間×奥行7間半の15坪×2階＝計30坪、高さ約6mのコンパクトな箱を置き、高さ方向を3層に分割した構造フレームとし、2層分(約4m)のダイニングキッチンとリビングが2mのレベル差で緩やかに連なる立体的な構成とした。リビング南面の大開口からは、冬季には存分にダイレクトゲインを得られるとともに、軒や庇により夏季の日射



図2:リビングからダイニング・キッチンをみる
(写真:鈴木淳平)

は遮ることができる。空気的にはひとつながりの一室空間であり、各方位に設けた窓の開閉により自然通風が可能である。メッシュや半透明壁を設けることで街との距離感を適度に取りながら、変化する光や風を存分に取り込める構成とした。(図1,2,3,4)

このような建築を限られた予算の中で実現するために、徹底的に少ない部材と低価格な機器の組み合わせで高い性能を確保する技術的工夫を重ねた。

まず、シンプルな在来軸組とし、外張り断熱により内装材を省き、木の構造や下地、配管、配線を現しにすることで、内部

は木材に包まれた温かみのある空間とした。それにより、住まい手はその建物の仕組みを理解し、自身で直したり手を加えたりしていくことも可能となった。構造計画としては、各床短手方向両端に構造用合板や鋼製ブレースによる耐力壁を適切に配置することで、空間のフレキシビリティと透明性を担保しながら、高い耐震性能(等級3)を達成した。加えて、小屋組の簡略化・垂木の省略など、最小限の部材で構成する工夫を徹底するとともに、接着剤を可能な限り使用せず、解体と材料転用を容易にした。

環境・設備計画としては、フェノールフォーム・ボードによる外張り断熱と高性能窓サッシ・庇による外皮計画により、UA値0.49(ZEH+基準)・ η AC値2.2(省エネ基準以上)といった高い外皮性能を達成した。シンプルな構成により施工性を高めた上で、現場での監理を適切に行うことで、C値0.3cm²/m²といった高气密も達成した。加えて、外気を床下空間に導いたうえで室内に導入するといった換気ルート of 工夫により、ローコストながら快適な温熱環境を実現した。また、外構に



図3:配置図

溝や穴を掘り、有機物を埋設し、土中の水と空気が動くようにするなど、住み手を含めたワークショップによって、土中を含めた敷地全体の環境改善も試みた。

以上のように、「豊田の立体最小限住宅」では、内(家族)と外(都市)に開かれ、光や風、自然素材に溢れたデライトフルな住宅を、最小限の物質とエネルギーで実現するとともに、解体および材料転用のしやすさに配慮し、敷地全体の環境改善も試みた。施工や今後のメンテナンス/改変に住み手が関われるような設えとしている点も重要だ。これは、地球環境危機の時代に求められる都市住宅の新たなプロトタイプ of 提案である。

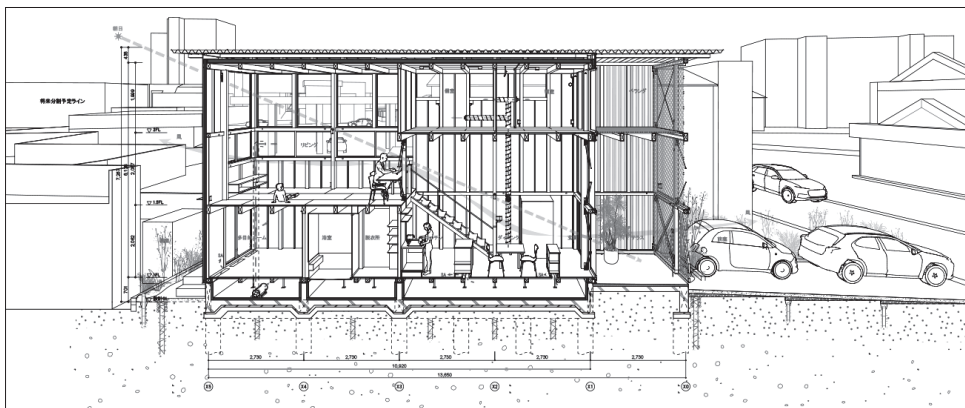
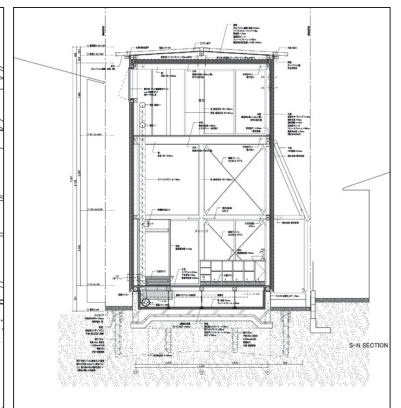


図4:断面図



川島 範久 KAWASHIMA Norihisa

建築家。川島範久建築設計事務所代表取締役。明治大学理工学部建築学科准教授。1982年生まれ。2005年東京大学卒業。2007年東京大学大学院修士課程修了後、日建設計勤務(-2014年)。2012年、UCパークレー客員研究員。2016年東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)取得。2017年川島範久建築設計事務所設立。

明治大学 准教授
川島範久建築設計事務所 代表取締役
建築家 川島 範久



ゆっくりとなめらかに建築を考える

●開催日:2023年 9月23日

●講師:建築家 辻 琢磨氏

JIA岐阜 2023「JIAの窓」講演会を、9月23日土曜日17:00～建築家 辻 琢磨氏をお迎えし市内柳ヶ瀬近くの岐阜ビル1階で開催しました。当日はJIA岐阜所属会員、法人会員、JIA愛知所属会員、大学の学生・先生、これまでのJIAの窓に参加頂いた個人建築家等28名が参加しました。

内田JIA岐阜会長の挨拶、講師の辻さんの紹介の後、設計事例として自邸の改修、辻堂の引っ越しを事例に講演して頂きました。講演の中で特に印象に残ったキーワードは、

- ① 建築家っぽくない。
- ② 一新はしない。
- ③ 更新設計

の3つです。講演中にメモとることがままならず、後日、辻氏のエッセイ、新建築に掲載の記事、対談記事を読ませて頂き、執筆しました。

これまで手掛けられた作品の中から、先ずは自邸の改修について、祖父が建てられた築45年の住宅で、少しずつ改修を行っている事例を紹介して頂いた。少しずつ改修を行う理由を4つ挙げられた。

① 少しずつリフォームすることにより借金が要らない。(住宅ローンに依存しない家づくり)

② 成熟社会が生んだ余剰社会と向き合う(部屋余り、当初の使い勝手と違って物置部屋に等、時間が経てば生活や要望が変わっていくが、家を買う時は一瞬である為、ズレが起きている。)

③ 動きそのものを建築としてとらえる。(一つの場所に素材を集めて固定させる建築でなく、ある場所からある場所へ動くことや、空間の変化動きを建築として捉えことで発想、創造性があるのでは。)

④ 広々と住まいながら丁寧に場所を考えたい。(広いことで住みながら改修が続けられる。)

一般的には当たり前にお施主様の要望に応え、設計し、完成を目指す考え方であるが、その後の生活の中で子供たちの成長、家族構成の変化があるにもかかわらずそれ程考慮せず、空き部屋、倉庫化する現状があるかと思えます。講演を聞き、完成時がゴールでなく、もっと先を見つめた空間づくりをお施主さんと共に考え取り組む姿勢



が必要かと考えさせられました。

続いて辻堂の引越について話を頂いた。旧マンションから引越した、タワーマンションの改修事例で、建築を固定された構築物とするのではなく、動きそのものをとらえた「流動の建築」で、それを実践する為、施主と設計者が生活に関する助言を主な業務とする「更新設計業務」の手法について話を頂いた。月々定額の顧問料を頂く方法で、現実の生活と齟齬を生まないように、その都度の生活や要望に合った空間を実現し続けることを目指したもので、完成までの短い付き合いでなく、完成してからも長くお施主様と共に家づくりを行うという考え方で。現実的には相当な覚悟とエネルギーが必要であり簡単ではないと思いますが今後ケースバイケースでこうした手法も考えられるかと思えます。

最後に質疑応答、こうして1時間半余りの講演会を終了しました。

JIA岐阜では12月にJIAの窓「20*20」を計画しています。事業を通してJIAそのものをわかって頂き、結果としてJIA岐阜の会員増強につながるよう取り組んでいます。



大瀧 繁巳 (JIA岐阜)
(株)金華建築事務所



羽島市役所旧本庁舎の利活用に関するシンポジウム 第2弾

●開催日:2023年10月1日

坂倉準三設計の羽島市役所旧本庁舎(1959年竣工・2003年DOCOMOMO100選)は解体準備予算が可決され、解体に向けて具体的に進んでいる状況にあります。10月1日市内の不二羽島文化センターにて市民有志による「羽島市役所旧本庁舎の利活用に関するシンポジウム」が行われました。今年5月に続く第2弾です(初回はアーキテクト2023年8月号に掲載)。会場参加者は80名ほどWeb登録は98名でした。

文化的価値のある建物を本当に壊してよいか、市の負担を軽減して利活用する方策がないかを、成功事例を参考にしながら市民と一緒に考える機会として催されました。

司会は清水隆宏氏(愛知工大准教授)、当初は市の旧庁舎あり方委員会のメンバーで6年以上存続に関わってきています。

基調講演

「羽島市役所旧本庁舎の重要性について」

・中川 武 氏(早稲田大学名誉教授・明治村館長)

旧本庁舎をこの地に残す重要性について、明治村に移築された建物やカンボジアなどで維持保存に関わった経験から、次世代につながる価値についてお話されました。市民には空間体験が大きく記憶に残っていること、実際の空間がなければその価値はつながっていかないと。庁舎を建設当時の一面の蓮田に建つ「1000年永らえる理想郷の蓮の花」に例え、未来に地域文化をつなげていくシンボルであると説かれました。

「上野市庁舎の保存・活用成功事例について」

・滝井 利彰 氏(伊賀市文化財保護審議会委員)

上野市庁舎に関わる14年間の経緯を話さ



れました。旧上野市庁舎はその直近で建設された羽島市役所の評判により坂倉に依頼されたそうです。存続が危ぶまれたころ、近代美術館鎌倉で坂倉準三展を知り、伊賀市での巡回展を企画、朝日新聞に特集を掲載させるなど市民に訴えかけたこと、利活用派の現市長を擁立して議会に対抗できる体制を作ったことなど、できることを目一杯やった苦労をお話されました。保存へ向かう中でも市民への働きかけを欠かさず、現在PFI事業による改修の実施設計が進められて利活用が実現しつつあります。あきらめない粘り強さが必要と激励されました。

「神奈川県立近代美術館 鎌倉の保存改修に関する成功事例について」

・山岡 嘉彌 氏(山岡嘉彌デザイン事務所代表)

土地の借地期限満了に伴い解体の危機となったが住民の反対により、鎌倉文華館・鶴岡ミュージアムとして整備完了した経緯。八幡宮と一体化が求められメイン入口変更など本来とは異なる建築計画の許容、文化財指定のために竣工当時の姿に戻す各部の改修、表に見えない形での耐震補強など実際の活用に至るまでの苦労をお話いただきました。

「旧本庁舎の保存利活用に関する経緯のまとめ」

・時田 憲章 氏(羽島あすなる会代表)

平成29年のアンケートでは7割が利活用を望んでいたが、市の試算による改修費用とその後のメンテナンス費用の発表により、保存の機運は弱まっていったそうです。

最終のあり方検討委員会には地元建築家はメンバーに入らず、建築的文化的な評価がないままに進められた。市は民間活用を公募したが明確な評価もないまま、令和4年12月に耐震性などを理由に解体を発表し、令和5年3月に解体準備予算が可決。12月には解体予算の採決が予定されていると切迫した状況を伝えられました。

「羽島市役所旧本庁舎の利活用に関する評価のまとめ」

・鯉坂 徹 氏(DOCOMOMO Japan副代表)



DOCOMOMOからは保存の価値を時間にかけて検討できるよう解体の延期を求めている。

坂倉作品の中で唯一スロープの構成、そり屋根などが残っている貴重な建物。パリから帰った坂倉の地元での仕事としての熱意が伝わる。日本では建築の評価が低い。近代建築は失われると2度と戻らない。喪失を防ぎ次世代で活用することが必要。大きな視点での価値を一個人の考えで失ってしまっはいけないと述べられました。また耐震改修の検討もまだ不十分と。

各氏の講演を踏まえその後の討議では、市との話し合いの場を作ること(今回も市の関係者が臨席していない)、地元建築家の関与が利活用に向けて必要であることなどが話され、解体是非の議論をより重ねる必要性は共有されたように思えます。

最後にモデレーターの堀田典裕氏(名古屋大学准教授)のまとめの中で示された「歴史上・芸術上・学術上の価値がある文化財」「羽島市庁舎は市民だけのものではない」という言葉により、一つの建物はその地にあつてこそその価値が強いため、保存を地元市民だけの問題として委ねてきた感がありましたが、それでは保存は大概不可能で、日本中の人に問うていくべきものという思いが強くなりました。

服部 昌也 (JIA三重)

八武組



追悼 故 清水一男氏

静かな熱意

清水先生が学府を卒業されて職に就かれたのが、広島のみちでした。被爆後の凄烈に破壊された風景をみて、若い先生はどの様な思いであつたのでしょうか？

勤め先は河内義就氏の設計事務所で、師の中村順平氏譲りの精力的な活動をなされていきました。その足跡は多方面で見受けられ、戦後復興へ大変貢献されています。先生はその右腕としてご活躍をされ、独立して拠点を三重県に移してから、専門分野のみならず、建築文化の啓発や社会的な団体での支援活動、民事調停など、地域の発展にご尽力されてきました。特に、まだ県内に少なかった鉄筋コンクリート造や鉄骨造を用いて、安全で機能的な建物の普及を促すとともに、良い建物は奇抜でなくさりげなく素敵なものという考え方を示されたのは、ものの本質を極めて美の把握を目指した中村氏・河内氏の手法や思考の影響を受けており、さらにご自身が様々な経験から培った(近代)建築への“熱い”思いが背



三重の2017年通常総会記念講演会にて



景にあると思います。また、現場や会合では、どの方にも分け隔てなく接する姿勢で、常に襟を正し、紳士でお優しい人柄はまさに名誉会員に相応しく、お手本とすべき人物でした。晩年は、お顔をみる度に、JIAの建築家制度の進捗について尋ねられました。これも設立からの目標であるこの課題に“熱い”思いが宿っていたのだと思います。

先生のご功績に深甚たる敬意を表するとともに、心からご冥福をお祈りします。

奥野 美樹 (JIA三重)

奥野建築事務所



追悼 故 森 鉦一氏

爽やかに ARCHITECT は不滅なり

いつも背筋を伸ばされていたお姿は、氏の生きざまそのものようで、懐かしく思い出されます。数ある建築設計監理者の職能団体でも、日本建築家協会(JIA)、日本建築協会(AAJ)と名古屋建築設計研究会(NSK)の三会で、常に先輩建築家として慎重かつ丁寧にご指導いただいたことが昨日のこのようです。

取分けJIAとの関わりには特別な思い出があります。小職のJIAの入会は1987年の(社)新日本建築家協会の発足時に遡りますが、発足し

て3年目、1990年の春。当時愛知部会(現愛知地域会)のプリテン委員長で、次期愛知部会々長候補であった故 森鉦一氏からの一本の電話で、同委員長の後任を要請され、機関誌 ARCHITECTの編集責任者としての参画がその活動の第一歩でした。

同誌の創刊号は、1988年10月1日に発行されています。その奥付によれば、ARCHITECT創刊号(第1号)、発行日1988・10・1(毎月1回発行)、定価380円、発行所 社団法人新日本建築家協会東海・北陸支部、発行責任者 栢本良三、編集責任者 森鉦一、編集 愛知部会プリテン委員会・建築ジャーナル(以下省略)と表示されています。翌月の第2号を見ると、発行所は社団法人新日本建築家協会東海・北陸支部愛知部会と表示されています。どんな事情があつたのかも分らないままにお引き受けしたもの

の、待ち受けていたのは定期刊行物としての発行の原則、編集権の独立、何よりも編集委員の人选等々で、当面の仕事は1990年6月号(第21号)の発行でした。

こんなむつかしい状況にあったARCHITECTの編集責任者を小職に要請された経緯は、ついでご本人から何う機会もないままに過ぎてしまいましたが、これを契機にJIAの活動に参画することになり、今日までその活動を幅広く継続できましたことに、氏の慧眼かと驚くとともに、改めて感謝の念を抱く次第です。これからも氏のご意向を汲み、JIAの活動に微力ながら協力することをお誓い申し上げ、冒頭の句を捧げ、感謝とお別れの言葉といたします。 合掌

森口 雅文 (JIA愛知)

伊藤建築設計事務所



日本建築協会東海支部第20回 会員交流ゴルフコンペ 2004年6月3日中京ゴルフ倶楽部石野コースにて(前列左から2番目が森氏、3番目が筆者)



▲ 仕込み蔵内部

朝夕の寒さが、時の移り変わりを感じさせる。10月中旬、知多郡阿久比町の丸一酒造を訪れた。

夏の終わりとともに、2階建ての麹蔵では、仕込みの季節に入る準備をしてその時を待つ。道に沿って坂を上り振り返ると燻瓦屋根に白漆喰鉢巻き、黒い下見板さらさら子押えの酒蔵の切妻屋根が緑の林を背景にいくつも建ち並ぶ。その風景は初代当主新美市郎により大正6年に創業以来、現在もこの地で続いている。



▲ 酒蔵屋根の風影



▲ 販売店舗正面



▲ 製品蔵と事務所棟

南北通りに面した敷地には、南に昭和初期に移築された梁間6間の2階建て製品蔵があり、麹蔵、仕込み蔵、試験室、釜場と続く。麹蔵は柱も梁も太い。その2階には常に室温を30°C以上に保った麹室で、米麹をつくっている。仕込み蔵では、冬場でも仕込み桶に冷却マットを巻き、冷水を循環させ発酵に最適な温度を保つ。こうすることで寒造りのおいしい酒が出来るという。

仕込みの始まりとともに、新たな年にむけ、新たなお酒が造り続けられる。

【概要】

丸一酒造株式会社

住所：愛知県知多郡阿久比町大字植大字西廻間11番地

【構造規模】

製品蔵：木造2階建、切妻造

建設年：昭和初期移設により建設

麹蔵：木造2階建、切妻造

建設年：大正6年

仕込み蔵：木造平屋切妻造

建設年：大正6年

後藤 文俊 (JIA 愛知)

アトリエ後藤建築事務所



編集後記

●全国大会は穏やかな天候に恵まれましたが、その後急激に寒くなったりまた暖かくなったりと気候

の不安定な日々が続いています。

さて今号では故人を偲び、過去の建築作品を通じて住まいの本質を再考する記事が充実しています。そして、阿久比町の丸一酒造に焦点を当てた記事では、伝統的な酒造りについて書かれています。建物の詳細や温度管理についての詳細な描写からは、寒造りの酒に対するこだわりと工夫がうかがえます。地元の風土や環境に根付き、変わらず酒を作り続ける姿勢に感銘しました。

建築においても根底にあるものを変わずに持ち続け、過去の知識を大切にするという点において酒造りと共通性を感じました。その上で新しいアプローチやアイデアを取り入れて進化

していくと同時に、未来を見据えた活動をする事の大切さについて改めて考えるきっかけとなりました。(石川 英樹)

●JIA建築家大会2023東海in常滑が11月11日に無事終了しました。『ARCHITECT』では、大会内容を紹介し参加を呼び掛けてきましたが、おかげで大変盛会となりました。スタッフの皆様、お疲れ様でした。東海支部が担当する全国大会は10年に1度くらいということで、大会準備状況や課題を記録として残し、今後の機会に役立てたいと思っています。単に大会のプログラムを掲載するのではなく、活動している人の想いなどに焦点を当てた内容の掲載に心がけています。今月号は終了直後の発行なので大会の記事はありませんが、次号では大会の反省などが掲載できると思います。

さて、今月号に掲載された故森鉦一氏の追悼文から機関誌『ARCHITECT』発刊当初

のことがわかります。初代編集長の故森氏から多くの方がバトンを受け継ぎ、35年間定期刊行物として続いてきた歴史の重みを改めて感じました。(川本 直義)

ARCHITECT

第423号

発行日 2023.12.1 (毎月1回発行)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会ブリテン委員会

株式会社イツミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

JIA TOKAI ARCHITECTURAL PRIZE FOR HOUSING PROJECTS 2023

「第10回JIA東海住宅建築賞2023」 現地審査及び公開最終審査会

さる9月30日10月1日の2日間で東海住宅建築賞の現地審査が行われた。1日目は天候にも恵まれ、審査員の先生と浜松駅で合流した後に1件目の「衝立の家」から審査を開始した。「下青島の家」(藤枝市)「剛な天井」(豊橋市)と3作品の説明を現地受け、移動時間の長い1日目を終了した。2日目は岐阜県関市の「SLBH11」からスタートした。雨が降ったりやんだりする中「小径のすまい」(名古屋市北区)「芳野の住宅」(名古屋市東区)を審査した後、大同大学に順調に到着し最終審査会となった。これまで台風の影響などからもギリギリ逃げながら現地審査を行うことが出来た事に感謝である。今回の応募作品は17点と去年の24点から減少しており、応募数の減少傾向を止めることができず、今後の運営への反省点を残した。原因としてはPR不足や高額な応募料などが考えられるが、幸いなのは応募数が減っても作品のレベルは維持されていることである。

以前から感じていたことなのだが、審査にあたって建築としての評価と共に住宅を建築家に発注し、使いこなしている

「施主力」の影響が大きいことだ。「芳野の住宅」は設計者の妻と構造設計者である夫との協働による自邸であり、狭小地に鉄骨でフレームを作り杉板の外皮で囲うという空間で住むことへの挑戦が行われている意地の住宅であった。「下青島の家」は昨年からの再挑戦で優秀賞を勝ち取った設計者の自邸である。シンプルな形状であるが外部を巧みに取り込んだ空間を、奥様と工夫しながら暮らしている姿が垣間見えた。「衝立の家」は共同設計者の実弟の家で、完成度の高い構造的な住まいである。姉と弟の力関係も想像しながら拝見したが、そこには子供たちが楽しんで暮らす姿があった。「SLBH11」は設計・施工に至るプロセスまでがユニークな作品で、計画案も含めると11作品目である。住宅建築賞ではお馴染みのシリーズであるが、応募のたびに完成度が上がっているのには驚く。見た目だけが洗練されていくのではなく「洗練された日曜大工性」を深めているのである。この家に完成はなく施主は住み、作り続けていく。「剛な天井」は乳牛と人が共生するというユニークなプログラムに対して経済性ギリギリの提案である。農業都市豊橋に生まれ、そしてここに住むという個性の表出である。今回大賞を受賞された「小径のすまい」の施主は物を持たない主義の方で、審査員から物に関する暮らし方についての質問を受けていた。後でわかったのだが、施主の引越し前の住まいは我々の事務所が設計した共同住宅であった。収納のほとんどない「クレイタスパーク」という共同住宅シリーズで「白



大賞が決まった緊張の瞬間

亜紀」を意味する。哺乳類が誕生する直前であり、世界的な化石コレクターであるオーナーのここから若者が巣立ってほしいという願いが込められている。不思議な縁である。そして、「住宅は1日にしてならず」である。

現在、東海支部では「登録建築家」やJIAによる公共建築のコンペ、プロポへの設計選定支援について議論がなされている。全国大会でも3つのプログラムが生まれ、例年以上に活発な議論が交わされている。公共建築における設計者選定の応募資格に認められる「登録建築家」の資格要件に住宅賞をはじめとする賞の受賞歴を入れることも十分に考えられる。住宅賞を受賞した建築家が小規模な公共建築への設計機会の優先権が与えられても不足はないと思う。それくらいレベルの高い作品の作者たちだ。

「来年は応募作品が殺到したらどうしようか」



剛な天井での現地審査



吉元 学 (JIA愛知)

ワークキューブ
愛知淑徳大学



◎ 最優秀賞:「小径のすまい」 田中郁恵 / 田中郁恵設計室



○ 住宅建築賞:「芳野の住宅」
熊澤暢子+木村俊明 / KKuma



◎ 優秀賞:「SLBH11」 河合啓吾 / 株式会社 TAB



○ 住宅建築賞:「剛な天井」
水谷晃啓 / 豊橋技術科学大学、M2A



○ 住宅建築賞:「衝立の家」
浅井裕雄+吉田澄代 / 裕建築計画



◎ 優秀賞:「下青島の家」
水野芳康 / 株式会社 水野建築事務所